

# 証言をつなぐ 戦後70年

15—18面に特集

## 障害ではなく時代が憎い

パステルカラーのカーディガンがよく似合う。鹿児島市のデイサービス施設を訪ねると、上村慶子さん(76)が電動車いすで迎えてくれた。職員に「おしゃれにしとるね」と

声を掛けられ、ちょっと照れながら。今回の「証言をつなぐ」特集のテーマは「障害者と戦争」。上村さんも四肢や顔に障害があり、もう70年以上、歩いていない。

鹿児島市 上村慶子さん(76)

「戦争がなければ歩いていたかもしれないんです。情けないですよ」  
真っ先に振り返ったのは6歳、1944年ごろの出来事だった。生後すぐ、足がまひして力が入らなくなっていた

## まひ治療中 医師は戦場へ

が、母の親戚に医師がいて、専門的な治療を受けるチャンスが巡ってきた。激痛で泣きわめくほどだった施術の直後は、立って1歩、2歩、3歩、足を前に進めることができた。「母はね…、泣きましたよ。慶子が歩いた、慶子が歩いたって」

もう一度、集中治療を施せば改善する可能性があると言ある。45年4月8日、鹿児島市の市街地が本格的な空襲に見舞われたときもそうだった。自宅近くの温泉を訪れていた。少しでも足が良くなるようにと、湯に漬かり、母にさすってもらったためだった。



身ぶり手ぶりを加えて体験を語る  
上村慶子さん＝鹿児島市  
(撮影・古瀬哲裕)

「一度、集中治療を施せば改善する可能性があると言ある。45年4月8日、鹿児島市の市街地が本格的な空襲に見舞われたときもそうだった。自宅近くの温泉を訪れていた。少しでも足が良くなるようにと、湯に漬かり、母にさすってもらったためだった。」

温泉の煙突も屋根もあつという間に壊れていく。裸で逃げ出す人もいた。近くの防空壕はどこも満員。母は自分を背負ったまま、狂ったように叫びながら自宅へと走った。近所で大勢の人が死んだ。背中越しに伝わる母の涙に、幼心に申し訳ない気持ち膨らんだ。しびれる手足がもどかしかった。

「大きくなっていく私をおぶる母は大変だったと思えます。憎いですよ」  
障害そのものではなく、あの時代が憎かった。

32面に続く

(第3種郵便物認可)

「変な顔」「おまえの食べ物ないよ」

1面から続く

桜島を望む高台の自立ホームで、上村慶子さん(76)鹿兒島市は暮らしている。障害者が働く作業所なども併設され、そこで昨年夏から戦争体験を語り始めた。熱心な職員に勧められたからだった。

「変な顔」「おまえが食べる物はないよ」…。若い施設利用者たちを前に思い出すのは、戦時中、母の背中で聞いた暴言の数々だ。手足と顔にまひのある娘をおぶって歩く母に、通りすがりの人が冷たい視線を浴びせた。わざわざ呼び止めて「荷物かと思ったら何だ。そんなのからって出掛けるな。みっともない」と言い放つ警察官もいた。父は軍人で、生後3カ月のころに戦地で命を落とした。男は戦場へ、女は銃後を支える。できなければ半人前。弱者にとことん厳し

母の背で聞いた暴言



施設の職員と談笑する上村慶子さん(左)。「今が一番楽しい」という(撮影・古瀬哲裕)

い空気が、子どもにまで押し付けられる時代だった。それでも母は世間の目を気にしなかった。外に敷いたごきに座らせて遊ばせてくれたが、姉と兄は嫌がった。「私たちまで笑いものになる」「嫁をもらえなくなる」。親子げんかの原因はいつも自分だった。

「何でこんな体に生まれ たのかって、泣いたこともありません」

飛び出したくても1人ではかなわない。ほとんどの時間を家の中で過ごした。字を覚え、本を読む。「障害者のくせに」と声が聞こえても、母はたくさん本の書を借りてきてくれた。

終戦は宮崎の疎開先で迎えた。戦争から遠ざかるにつれ、世間の空気が変わりはじめた。13歳のころには、

木箱に3輪を付けた車いすを手作りしてもらった。それで教会に通い、友人ができた。思い通りに動き回る娘を見て、母は泣いた。

「母は『学校にも行かせられず、すまなかった』とよく言っていた。でも私はまだいい方だったんです。母が優しかったから」

二人三脚で生きてきた母にも徐々に老いが迫り、少しでも自立できればと、40代半ばから福祉施設に通い始めた。亡き母が病に倒れたのを機に今の施設に入り、17年がたつ。

今、1人部屋でヘルパーの手を借りながら自由に暮らす。おしゃべりが趣味で、取材の日に着ていたカーデイガンも、電動車いすで時々出掛ける繁華街のデパートで買ったという。

「読書も買いたい物も堂々とできる。今が一番楽しいですよ」

母の背中で聞いた暴言を耳にすることは、もうないだろう。平和な時代が続く限り。(森井徹)